

娘・母関係の物語 (三)

山田 英美

第一部 『補遺』 — 目次

はじめに

第一話 高校への復帰と大学進学

— ふたたびカトリックと出会う

第二話 専攻の決定

— 母の言い分

第三話 卒業後の進路

— ふたたびの抗争

第四話 大学院進学之路

— 修道院に寄宿する

— K市での下宿

第五話 現状からの脱出

— アメリカへ

— そして三十歳になる前に

第一部 『補遺』

はじめに

娘・母関係の物語 (二) では、第十話から第十一話の間に詰まっている青春の日々を空白にしたまま、「母の死」のよる娘・母関係の決着過程を「歩み寄り」として、第一部に一気に幕を引いたのだが、急ぎすぎのきらいがあるとの評があつた。

青春時代を俎上に載せるのは、これまで以上の勇氣とエネルギーがいるのであるが、自分自身ときちんと向き合うためには、たしかに必要な作業であると思ひ直して、今回、第一部『補遺』の稿を加えることにした次第である。

承前

第一話 高校への復帰と大学進学

—ふたたびカトリックと出会う

翌年春から一年下の新入生と机を並べて新規まき直しの高校生活がはじまった。体調はすっかり元通りとは言えず、慢性的な頭痛もちで体育の実技は見学という状態ではあったが、それなりの自覚をもって勉学に勤しみ、新しい友だちとの付き合いもたのしかった。

山田（文獻Ⅰ）が解釈するように、受験生としての仮のアイデンティティを獲得して暫時の安定を得ている時期であった。

進学する大学を決めるときには、父の仕事や専門とはできるだけ距離のある、できるだけ関係の薄い分野をというネガティブな感情だけははっきりしていて、はじめから理科系技術系は考えなかった。それは親子関係の上から言えば、親との確執の真只中にある子どものとりがちな頑なな道であり、決して幸せな平穏な状態とは言えなかったろう。ただ親の学費負担のことも考え、いろいろに迷った結果、国公立のうち母が昔あこがれていたという古都にあるNR女子大学に決めたのだった。兄は自分の大学卒業と入れ替わって入学する妹のために、

「〇は、女の子だから、僕のようなわけにはいかないよ。」と、母に経済的な支援のことを進言してくれていた。それでも現代の女子学生とは比べようもない質素なぎりぎりの生活だったが、りんご箱をいくつも使ってベッドや本棚にしつらえるというようなことは、

おもしろくもあって、惨めさなどみじんも感じなかった。むしろそれは昭和三十年代半ばの平均的な生活のありようだったかもしれないのである。官舎に住まわれている教授のお宅をたまたま訪ねたときに、大学の先生は雲の上の人という感じがあったのに、座敷のへりにそつてずらりと置かれたむき出しのりんご箱から本があふれているのを見て、「私たちと同じ…」と、さすがにちよつと驚いたものだったが。

学期ごとの成績を母に手紙で書き送り、幼い子どもが「おかあさん、見て、見て」と母に褒めてもらって安心するという心性さながらのことをしながら、ひたすらまじめに授業に出るといふ日々を送っていた。

そんななか、自宅通学のクラスメイトたちから、市内で唯一英語圏の外国人が住んでいる所に行ってみましょうよと誘われてついでいったところが、カトリック教会だった。庭のベンチに、裾まである黒い司祭服姿の外国人司祭が、膝の上の書物に目を落としていたが、私たちの訪問でさつと立ち上がり、「女子大生ですか？」と独特のイントネーションの日本語で訊ねた。私たちがナマの英語に触れたいという目的で訪れたとわかると、背の高い若い司祭はいたずらっぽい笑みを浮かべて、今度は英語で自分はオーストラリア出身でG神父というなどと自己紹介されたが、私は一步そこに足を踏み入れたときから、かつて入院した聖マリア病院のパラダイスのような庭の記憶がさつと甦えり、胸に迫るものを覚えて、半ば呆然とし

ていた。おすおすと聖堂の入り口のほうを指差して

「私のような（信者でない）者でも、あそこで祈ることができま
すか？」とたずねたところ、G神父は

「もちろん！」とややぶつきらばうに答えられた。その、人に媚
びない対応に一種のすがすがしさを覚え、私は安心して、以来忘れ
えなかった、特別の、懐かしい人に会うような嬉しさでいっぱい
になりながら、たたみ敷きの聖堂の奥にある祭壇に向かってひざまず
いたのだった。

その後は、クラスメートとは別行動で、毎週G神父から英語会話
とカトリックの要理を教わることになった。そのうちキリスト教に
ついて、求める気持ちと、それにブレーキをかけるような知識欲が
拮抗し、英会話よりも要理に書かれているいろいろな事柄を質問す
ることに時間を使うようになった。一年以上たつて、G神父は、
「あなたの質問に答えたり議論するために、私は知っている日本語
をぜんぶ使いました。」と笑いながら、要理の勉強はこれく
らいでよいというような表現を初めてされた。私にとって、納得が
いかないことをあいまいにしたまま洗礼を受けるということはあり
えなかったし、カトリックの布教の姿勢も決して無理強いをするも
のではなかった。コンスタントに続けた勉強の合間に、ミサに与つ
たりロザリオの祈りの夕べに参加したり、理屈ではない祈りの世界
に触れてもいた。神父たちが身につけている異国の文化からも新鮮
な感動をあたえられるものがたくさんあった。

二年生の秋たけなわの頃、私はカトリックの洗礼を受けたいと思
い、それを願った。いきさつだけを手紙で両親に知らせたとき、予
想しないわけではなかったが、父母はこぞって反対の返事を送つて
きた。父は一つの信仰に固まると「凝り固まつて」広い視野で物事
を見られなくなるのでやめよ、と言ひ、それはいかにも正論のよう
な感じがあつたが、私の場合はそれは違う、と論駁できる力を感じ
ながらも、私はあえて黙っていた。しばらくして母が再度よこした
手紙にはいろいろ雑多なことが書かれた後に

「もう洗礼を受けたことと、思います。」とあつた。そのときはま
だ式の日は過ぎていなかった。父の意見も母の心配もカトリックと
いう宗教をまったく知らないためのことだし、私の心の成長過程を
理解していないからだとわかつていたので、決心は揺らぐものでは
なかったが、母のそのあきらめ半ばの手紙は、結局は娘のことを気
にかけていることが感じられて、嬉しくもあつた。もはや何のため
らいもなかった。代母（受洗の証人かつ信仰上の親のような役割を
とる人）には、翌春の卒業後長崎の修道院に入ることが決まつてい
た同じ下宿の先輩Aさんをお願いし、引き受けてもらった。

G神父は私の洗礼式を執り行つて間もなく、同県内の新しい教会
へ赴任して行かれた。『NR教会での私の末っ子』と手紙に書いて
くださったときには、甘え足りずに育つた私には、「末っ子」とい
う甘酸っぱい響きの言葉が何よりのプレゼントと感じられた。撒か
れていた小さな種が水を得、降り注ぐ光との啐啄によつて芽吹き育

つように、その受洗は私の生涯のうちでまさに第二の誕生といえる、もつとも感動的なきこととなった。

第二話 専攻の決定 — 母の言い分

それからの学生生活は、奇る辺があるためにかえつて余裕をもつて、自分の欠点とも向きあい、読書に親しみ、祈り、広い教養科目の勉強にはげんだ。おりから六十年安保の渦は女子大生の間にもうねり、甲か乙かの態度の選択を上級生や級友たちから迫られたときには、いっしょに炊き出しのおにぎりを握つたりしながらも、個人的には学生の本分として今は地道に勉強すべきとの気持ちが強かった。悩ましげな表情の教授連にとつては無害な学生の一人だったにちがいない。

専攻は三年生になるときに決定することになっていたので、周りの雑多な意見と自分の好みとをどう折り合いをつけるかということだけだった。私は、優れた教授たちの講義を受けて、哲学や倫理学や社会学に強い関心を抱いていたが、母が

「哲学だけはやってくれるな。」と頑強に口を挟む。なぜ、と追求すると

「哲学を勉強すると自殺をするかもしれないから。」という言い分だった。呆れて、これがわが母かとまじまじと顔を見つめてしまったが、将来、哲学の勉強をどう職業にむすびつけていけるかということまで考えるとあえてそれを選ぶこともないと考え、選択肢から

はずした。あまり迷いもせずにと簡単に英文学や国文学を専攻するクラスメートも多かったが、私は国語学や英語学ならできないかもしれないが文学となると文学的才能に関しては全く自信がない。

そこでそもそも自分にとつて未知の分野である心理学をやるうと思つたのだった。それでも高校時代の友人の中には

「心理学を勉強している親戚の兄ちゃんがいるけど変人だよ、〇さんやめときな。」などと忠告してくれる人もあつた。この意見には『私もどちらかというとなつてほうだし…』と内心合点するところもあり、傷つきやすい子ども心をもつと理解できる大人になりたいという内的な動機も強く、ついに心理学をメジャーにきめたのだった。

夏冬の長い休みは、なんとなく気が重かつた。特に休みがおわつて大学にもどるときには自分でも理解できない寂寥感におそわれるのがいやだった。現実の親離れ子離れの助走体験をしていたからかもしれない…。父が

「なんだ、もう帰るのかー何でそんなに急いで帰る必要があるー」と怒つたように言うのは、父も実はさびしいのだ、ということに気づくのはもつと後になってからのことである。

母に対しては、何でも逐一話したかつた。帰省途中の電車内でお年寄りに席をゆずつて、ずーっと立っていた、というような報告は、「それはよいことをしたね」と評価されることを望んでいたのに、母は

「あほやなあ。」といやにきつぱり言った。それは娘のしんどさのほうに同一化した母の労わりの心だったのかも知れないが、それよりも『客観性に欠ける許せない家族エゴイズム!』というような落胆のいりまじった批判感情が勝って、私はため息をついていた。大学に入って家族との物理的距離をもつまでは、両親の不条理な言いに對して胸が張り裂けそうな怒りと悲しみと絶望のない混じった反抗心が胸に渦巻くのをあますことがたびたびあった。その思春期の頃とはちよつと質の違う親に対するアンビバレントな「両価的」感情が明瞭に私の胸を去来した。私にとつては、世界の政治的情勢よりも父母との感情関係のほうが悩ましいという、依存と自立をめぐる茫とした青年期的世界からまだ一步も出てはいなかったのである。

第三話 卒業後の進路 — ふたたびの抗争

カトリックの信仰によって得た最大のものは、『安心して依存できる対象をもつたこと』ではなかったかと思う。いよいよ卒業後の進路を考える四年生になったときには、社会科の教員免許を取得するための附属高校での苦しい教育実習も終え、私はどんな職業を選ぶかというよりも、ひそかに修道者になりたいという気持ちを募らせていた。NR市のカトリック教会の敷地内に、オーストラリアに本部を置く『善きサマリヤ人会』の修道会が経営する幼稚園があった。エレガントな修道服にきっちり身を包んだやさしいオーストラ

リア人シスターたち五、六人と日常的に接していたが、私のひそかな願望を察せられた修院長マザー・Mが、修道会が経営する高校で、社会科の教員として採用したいといってくださった。学校は九州の佐世保にあった。院長は、そこでシスターたちの生活をもじっくり観察して、もし将来強くその気になったら……という含みも持ちながら、まずは「フルタイムの教員として」という言葉を何度も使われた。

無試験で正教員として採用されるということができた最後の時代だったかもしれない。九州に行ったら、休日ごとに隠れキリシタンの里をたずねようなどという楽しい空想もしつつ、かつこよく「フルタイムの」と書いて親に伝えたところ、またもや猛烈に「反対!」ということを手紙で書いてきた。父は「フルタイム」という言葉を「パートタイム」と似たようなものと勘違いしたらしく、なんだか怒っている様子が目に見えるような書きぶりだった。カトリック系の学校と聞いて、わだかまりがむくむくと頭をもたげたのかもしれない。現代と違つて電話も使わずもつぱら手紙のやりとりだったので、誤解やずれがかみ合うまでに時間がかかり、その間にもろもろの状況も変わつてきたりする。

両親と話し合うために帰省したとき、気持ちを隠しおせなくてついにゆくゆくは修道院にはいりたいということまで持ち出したので、父はかんかんに怒つて「いまずぐ勘当する!」と申し渡した。「親は子どもに投資しているのだから。今後、生活費等も仕送りし

ないし、家族のだれかが病気になるというようなときにも一切知らせない。」つまり縁を切るぞ、という脅しをかけて、考えを翻させようとした。いまだき勘当とは一時代が過ぎていゝなあとびつくりしたが、明治生まれの父にはそれほど古臭いセリフではなかつたのかもしれない。妹も遠い地方の大学の三年生に在学していたので、親の経済的負担も大きかつたことだろう。苦勞して教育をつけさせて、挙句の果てに修道院に取られてしまうのかという構図しか理解できなかったのも無理はないのである。しかし、当の娘は修道生活をもつとちがつた次元でとらえることができるころまで、たしかに成長していたはずであつた。弾みではあつても、「親は子どもに投資しているのだ」という父の言葉にシヨックを受け、一夜明けて、黙つて大学へ戻ろうとする娘の背に、母が

「おとうさん、〇は死んだのやと思ひましよう。」と悲痛な声で言つた。

小さなディーゼル列車の車窓から、樹木の間我家が見えた。わが子が死んだと思へば、修道院にやつても耐えられる、だから娘がやりたいようにさせてやりましようという意味が含まれていた母自身の気持ちの収めようには、さすがに堪えた。

NR市に戻つてからは、下宿を変つた。下宿代と食費が要らない、つまり生活費は要らないという条件付きの家庭教師の口がみつかつたのだ。私たちは学生間で家庭教師のことをイギリス風にガヴァネスとかチューターと呼んでいたが、ちょうどそんな感じの、住

み込みで学校から帰つた娘さんたちの遊び相手になつたり勉強を見てあげたりするという仕事と生活だつた。その家族は駅前で旅館を經營してゐて、裕福だつたが奥さんが十分子どもの相手ができないからという。授業料は卒業まで納めてあつたので、休みの日に別のアルバイトを少しすれば十分やつていけた。もう授業は少なく、卒業論文もほとんど仕上げであつた。何よりも教会関係者や知人が優しく、いろいろな便宜を図つてくれたのに実質的にも精神的にも支えられていた。

ただ、両親のそれほどの反対を押し切つて突つ走るほどの蛮勇が、私にはなかつた。そのために毎日心が晴れなかつた。私が深く悩んでいることを氣にかけてくださった主任司祭のT神父が教区を管轄するF司教に相談するように取り計らつてくださった。F司教は大柄などつしりと構えた方だつた。私の話を聞いて

「あなたのような、純粋な心をもつ娘さんに育てられたご両親に、深く敬意を表します。」とまずおっしゃつたことに、驚いた。親は、特に父は私の前に立ちふさがつてばかりの頑固な悪い人！というような敵対心を持つてしゃべつていたので、その振られ方がかなり意外だつたのである。

「まあそつだとして、私はどうしたらよいのでしょうか？」と言いたげな顔をしていたのだろう。司教は、

「あなたが三十歳になるまで、世間でやりたいことをしてください。どんな状況であろうと三十歳になつたときにまた今の気持ちを

持ち続けていたら、そのときは誰がなんと言おうと気にせず、修道院の門をたたいてください。」と続けられた。

かなり具体的な指導である。三十歳というのはその頃の私には想像もできないほど遠い先のことにように感じられた。やりたいことって何だろう？社会科の教師というのは特にやりたい仕事というわけではなく、ほんとうは得意な分野でもない。また、これでおしまいとするには心理学の勉強も不十分すぎるくらい不十分…。それは、下宿の三人の娘さんたちと付き合う中でいやというほど気づかされた、私の浅学さの苦い認識であった。こんなことがあった。

長女のEちゃんは附属小学校の高学年。色白で平均より大柄、頭の回転が速く、勉強もできる優等生である。ほとんど世話を焼かせたりしない社会性の発達した子で、お客様が帰ろうとされると、さつとたちあがって自然なしぐさでドアを開けたりする子だった。ただ初語の軽い吃音があり、Eちゃんの内面のちよつとした複雑さを物語るものだったかもしれない。あるとき、旅館のほうに来ていたお祖母さんが、

「このころEがわたしのことを嫌って、ものすくく邪険にする。」

とこぼしたことがあった。「小さい頃のEはわたしの大自慢の孫だった。」「先生、なんとか言い聞かせてもらえませんか。」とEちゃんがいるところで言ったのだった。Eは私のほうにバツの悪そうなまなざしを送り

「だつて…。ねえ。」とつぶやいた。今の私だったら、お祖母さん

にわからないように『私はあなたの味方だよ。』というサインのウインクでもするだろうが、蒙昧な私はお祖母さんにもいい顔をしなればいけないような気になり、とっさに、おばあちゃんの気持ちも汲んであげて…みたいなことを言いかけた。その瞬間にEは、

「わかった！」とかたい表情で私をさえぎり、それきり心をひらいてくれなくなつたのである。一発で取り返しのできない失敗をしまつた私は、ついにEちゃんとの関係を十分修復できないまま、その後別れることになつてしまつた。

もつと心理学の勉強をしなければだめだ。子どもの心を理解できる大人になりたかつたんじゃないの？と自問し、未熟さを恥じて、心理学の勉強を続ける路を卒業後の選択肢に加えて、久々に母に手紙を書いた。

それに対して、母はたいへんな乗り気でもつて、大学院に行くなら学費を増やして出してあげるといふような具体的な提案までしてきた。実のところ、私のモラトリアム心性にとつてはこれは渡りに船の感があつたのである。

第四話 大学院進学之路

しかしさあ、それからがたいへんだった。進学しようと思う大学院研究科は入試に第二外国語もあつた。一、二年生でドイツ語を選択していたからそれ以外にはないのだが、単位は修得したもの、とつくの昔にきれいに忘れていた。自学するにもどうしてよいやら

途方にくれてしまった。そんな話を聞いたもとの下宿の小母さんが、

「親戚にドイツ語の先生がいる、近くに住んでいるのでたのんであげましょうか。」と言つてくださった。先生は同じ県内のもう一つの大学で教えていらつしやる方だった。そのお宅は、参勤交代時代の町並みの面影を残す黒ずんだ格子づくりの家々が並ぶ一郭にあった。センスのよい美しい奥様と身なりには全く無頓着な高潔な人柄の〇先生、その取り合わせはそれだけでいろいろのお話が生まれそうなカッパルだった。

先生はベスタロッチーの「隠者の夕暮れ」というドイツ語で書かれた薄い本を二冊取り寄せて、毎週一回お宅の居間で講読を指導してくださった。奥様が、ついでに夕食を食べていきなさいと、上品な手料理を出してくださることもたびたびあった。先生の大学のドイツ語ゼミに参加してもよいとおっしゃつてくださった。

今考えると、いかに貧乏学生といえども、月謝とかお礼などというものをすることすら考えない、まったく先生方の厚意に甘えつばなしの、赤面の至りのことをしていたのだが、誰もなんとも言わず、純粹に善意で応援してくださったのだった。それでも受験では、できなかったとしよげていたのだが、合格通知を受けたときには真つ先に先生の家に報告に行った。お二人は心から喜んでくださった。

のちに、大学で学生の教育に携わる立場になつて思い出すのは、

〇先生と奥様のことである。何も見返りなど期待しないで、求める学生のためにただ誠意を尽くして与える。それは親と子の関係でもいえることである。無償の愛によつて与えられたものであるからこそ、人の心をうち、それは意味のある循環として次代へと繰り返し継承されていくものではなからうか。

―修道院に寄宿する

新しい大学は電車を通うこともできる距離であつたが、生活の状況が変わつて住み込み家庭教師の仕事ができなくなつたので、新たに下宿探しを始めていた。そのとき、またもやマザー・Mが修院に空室があるので安い費用で貸してあげますよ。と言つてくださった。マザーもほんとうに善意の人である。中庭に面した清潔なベツドルーム、二食つき。早朝のミサに与ることもできた。至れり尽くせりの快適な生活空間であつた。そこで、将来修道院の一員になるか否かにこだわらず示してくださる厚意に甘えることにした。ただ一つ困つたことは、庭のアプローチの奥の、広い門扉がいつも私のために大きく開け放されていることだった。帰りが遅くなることもあるので、不用心ですからどうぞ閉めてくださいとお願いすると、「はい」とはおっしゃるのだが、相変わらず一人分は大きく開けてある。シスターたちの国の文化では、誰かが帰るのを知つていながら閉め切るようなことは礼儀に反することなのだろうか、と思いつつ、それが気になつて、友人たちとの付き合いも断つて帰りの電車

に飛び乗ることが多かった。修院の外門から続く森閑とした砂利の
アプローチを踏みしめながら歩いていくと、薄闇のなかに白い聖母
像が見上げる位置に浮かび上がる。前までくると手を合わせてあい
さつをし、さらに奥へと歩いていく。次第に、ここを通るのに自分
が何かしら異分子のような気がして落ち着かない気分を味わうよう
になってきた。そんなときには聖母像の前を行きつ戻りつ、いつと
き逡巡して、

「私は、これでよいのでしょうか。」と答えのもらえない問いをつ
ぶやいていた。

以前のからの知り合いのシスターたちは、まったく同じ態度で優し
かった。一人、新しく日本に来た元気のよいシスターが「○さん、
好き好き。」と、当初しきりに声をかけてくれたりしていたが、私
は最初から波長の違いを感じていて、それが相手にも伝わったのか
どうか次第にギクシャクするようになった。ちよつと言ひ回しがお
かしい日本語を直してあげただけでも、いじめられたようにとつて
唇をかんで涙くむなど、こちらも戸惑うばかり。私の髪にピンが残
っているのを見咎めて

「なんでそんな風になっているのですか？へんです。」などと攻めた
り。かわいさあまつて憎さ百倍になり、私のような中途半端な立場
の者の存在自体が解せなくて目障りと言いたげな感情が露わになっ
てきた。私自身は一人の修道女を好きとか嫌いとかそんな感情に振
り回される性質ではなかったが、もしかしたら、私がここに寄宿し

ていることで想像以上に彼女を苦しめているのかもしれない、それ
は彼女の修道生活にとってどういう意味があるのだろうか？と考える
と、とてもつらくなってきた。そこでマザー・Mには、大学院での
勉強がたいへんで帰宅もこれからはもつと遅くなるので、大学の近
くに下宿をさがそうと思うと申し出たのだった。

—K市での下宿

K市の下町にある大工さんの家の離れ—押入れに時々ねずみが出
没するような—に間借りをすることになって、それまでよりも時間
的には自由になった。しかし、経済的には貧窮して電車賃を節約す
るために歩いて通学したり、学生食堂で一番安い素うどんをすす
るということを余儀なくされることもあった。だが、運動靴を履いて
路地を歩くというのは、いろいろな発見があり、それなりに楽しみ
を与えられた。

小さな石の橋を渡ったところで決まってシナモンの香ばしい香り
が鼻をくすぐった。八ツ橋せんべいを焼いて売る店である。胸に香
りを吸い込んでまた歩く。

帰宅途中、とある路地に迷い込んだら花屋があつて、店先の大き
なバケツいっぱいササユリが無造作に入れてあるのに気づいて、
電撃に打たれたように引き寄せられていた。一本五円とある。これ
ならなけなしの小銭をはたいても二十本は買える。うれしかった。
私は幸せな思い出を再現するように腕に抱えて歩いた。

—ササユリは、私の原風景の中の花である。終戦直後に家族が住まいを転々としていたなかで、小高い山を背負った傾斜地にしばらく進駐軍が使つて空けて行つた兵舎に借り住まいしたことがあつた。自然の中の生活は私を元気にしてくれる要素があつた。初夏のころ山全体の緑の灌木の間に点々と、ほんのりピンクがかつた白いユリが咲き始めると、級友のマチコさんが「〇さーん！」とさそいに来た。私たちは裏山に駆け上り、腕いっばいにササユリを抱えて、上品だがむせかえるほどの強い香りにつつまれながら、意気揚々と下りてきたものだった。その幸せな気分は、山の風景とともに記憶にたたみこまれていた…。

路地裏にひっそりと店を張る古本屋は、時々ムシロの上に古本を並べて売つていた。覗いていくと、これまたとび上がるほどうれしい掘り出し物にであえることがあるのだった。

そんなささやかな喜びが点在するものの、わびしい下宿生活だった。部屋に迷い込んで羽音をたてる一匹の蠅ですら友だちのような気がしたのは、相当な孤独感があつたからかもしれない。ふすまを隔ててバスガイドさんが間借りをしていたが、母屋の人と話す鈴のようなよく通る声を時々聞くだけで、あえて話をしたこともなかった。家主の小母さんが「母屋の水道をお使いやす」と言つてくれるのを、遠慮して、離れのほうにある手押しポンプでくみ上げる井戸水をもつぱら使つて、「行つてまいります」「はようお帰りやす」といったあいさつを交わすのみだった。

ある朝のことだった。

ギーコギーコと一押しごとに洗面器に流れ込む水といっしょに、細い白いごみのようなものが器の中に押し出された。水面が静まるのを待つてよく見ると、その小さなものは自らくねくねと動く。ぞつとしながらどちらが頭だろうとなおよく観察するが、こちらかな？と思えるほうにも眼がなかつた！暗い井戸の中に住んで眼を退化させたその小さなものに背筋がぞくぞくとしたのは、一瞬、それに関心を重ねたのかもしれない。

—大学院の先生がたの授業はそれぞれすばらしかった。教育方法の諸科目は必修であるが、選択科目の教育学の先生方がされる情熱的な名調子な講義が好きだった。なかでもフレイベルの『人間の教育』をテキストに講義をされたA教授が、最後の時間に

「ゆくゆくは、諸君一人ひとりが『人間の教育』という本を書くのですよ。」とおっしゃった言葉がずしんときた。スケールが大きい。なのに…今の私は井の中の蛙にも及ばぬ、この虫のような状態なのではなからうか、と…。

第五話 現状からの脱出 —アメリカへ

二年目の連休あと、日曜日ごとのミサに通つていたS通りの教会に、一枚の張り紙があつた。

「アメリカに住む日本の研究者の家庭で求人」というものであつた。興味をそそられて司祭館を訪ねると、応対された神父さん

が、

「あなたのような人は、もったいないです。」と、詳しいことを話してくださらない。私がK大学の大学院生だとわかつてのことだった。つまり求人内容がベイビーシッターおよび家事手伝いのようなものだったかららしい。だめなのか…と、ちよつとがっかりしたが、深追いはしないで忘れかけていた頃、同じ神父さんから呼び止められた。

「先日のことを一応向こうに連絡したら、ぜひその人に来てほしいと言ってきたので。」とのことだった。

あらためて話しをきいてみると、往復の渡航費もアメリカでの生活費もすべて向こうもちという。娘が二人いてさらにもう一人赤ちゃんが産まれる予定であり、家族はカトリック信徒で、夫婦ともに研究者として働いているので、子どもたちのことも家事も全面的に託したいとの意向だった。私はおもしろそうだと思った。

その気持ちの背景には、大学院での研究テーマがヒトの「記憶」とか「学習」といった学部卒業論文の延長から抜け出せないことへの不満と焦りがあった。つまり、世間的な「女性なら児童心理学でしよう」というような短絡的なきめつけに対する反発心だけで眼をそらしていたが、私がほんとうに手がけたいのは「子どもの心」「まるごとの人」だったはずである。以前に三人娘のガヴァネスをした経験上、子どもと直に接することがいかに勉強になるかということを知っているので、きつと自分のためになるだろうと考えたの

だった。

ところがここでまた、ひと悶着もちあがった。父は、なんだかだと言いつつ娘に過大期待している節があり、何しに行くのかと追及し、向こうでの仕事が気に入らないという。もとの教会のT神父に話してみると、

「わたしも別の意味であまり賛成しませんが、反対してもあなたに行くでしょう？」と言いつつ当てられて、背中を押された気がした。

雇い主のUさんから、日本で自動車の運転免許をとつてきてほしいという要望があったので、いくつかの障害を乗り越えて、夏休みには着々と渡米の準備を進めていた。

休学届けも出して、いよいよ出発が近づいたときに、父は

「いったん行く上は、どんなに苦しいことがあつても契約期間内は絶対に帰ってきてはいけないぞ。」と大きい声で言い、母は

「もし、どうしてもいやだったら、こつそり母さんに言いなさい。帰りの飛行機代を送つてあげるから。」とささやいた。姉は

「もつと早く言つてくれたら、いろいろ作つてあげたのに。」と、徹夜で刺繍してこしらえたというエプロンやブラウス、そしてカード式の料理本を持たせてくれた。

私の渡米は晴れがましいものでもなく、かといつて卑下するものでもなかったが、U夫人は氣遣つて

「あなたの立場でこの仕事をやりおさせたら、将来何でもできる人になると思う。」と言つてくださったのは、心強かった。つま

り、精神的な強さや柔軟さのことを言われたのだった。U夫人は私と同じ大学出身の敏腕の生物学者であり、酒豪であり……。U氏は、時代の最先端をいく物理学の優れた研究者であり、ロマンティストでもあった。ひとりで食事をされるときには、私を相手にいろいろな話題をわかりやすく解説してくださる教養の豊かさ、言語表現の美しさには舌を巻いたものだった。

私は姉が持たせてくれた料理本の料理を片端から試作して、毎日腕を磨いた。勝気で利発な女の子たちは、会つてすぐから『おねえちゃん、おねえちゃん』と呼んで私を受け入れてくれた。ほどなくもう一人女の赤ちゃんが加わつて、三人の娘たちの日々と成長にかかわることも楽しかった。二人の大先輩から受けた影響は大きかった。研究に対する姿勢は並大抵のものではなく、しかも実に楽しそうに前向きに人の世を渡つてゆかれることに感銘を受けた。聞くところによるとU夫人も修道女を熱望した時期があったとか。

アメリカ東部の美しい学園都市プリンストンで、一年あまりをこの家族と過ごしたのだった。

—そして三十歳になる前に

帰国して復学。あと一年の間に修士論文を仕上げねばならない。論文の研究テーマを変えたいと指導の先生に話したところ、

「今から？」と驚かれ、ちよつと心配そうな表情をされたので、

論文はそのまま継続することにした。博士課程にも無条件で進める

といわれたが、いろいろの意味で転向するために就職したいと考えていた。自分で心配しないでもあちこちの大学から求人がある、ありがたい時代だった。

そんな一時期、週末ごとにお見合いもさせられた。はじめからその気はまったくないのでのんきなものだ。仕方なくとか、これも経験かなというほどの好奇心だけがお見合いの場に行く動機だったので、相手には失礼なことである。しかし、それも潮時というものがあるらしく、あるときを境目にぱったりそのような話も途絶えた。

生真面目な男友だちも何人かいた。思い出すと胸がひりひりと痛むような、まったくもつてひどい砂のかけ方をしたと思う人もあった。逡巡に逡巡を重ねたのは、まだ、「いかに生き、何をなすべきか」に吹っ切れないものがあつたからである。しかし以前の私を知る古い女友だちは「すっかり雰囲気が変わつた」と言つた。アメリカでの生活を通して、自分がさまざまなことに自由になるのになりに抵抗がなくなつたのは、確かだった。

教授からNG市にある国立大学の教育心理学科助手に推薦されて、あまり深くも考えずに、社会人としてまた研究者の卵としての第一歩を踏み出したときには、二十七歳になっていた。教室メンバ―が車で調査に行くときなど、私がすでに運転経験も豊富だということでのほか重宝がられたのには、「人生で無駄なものはない」といわれていることの証しのようにうれしかった。

同じ大学に同時に助手として就職したYRは私と同年だった。彼

も人生の道を逡巡してここに至った、ごくまじめな青年だった。大勢いる助手仲間と教授たちがごぞつて放課後から夜が更けるまで、毎晩のようにN G市の飲み屋に繰り出しては議論をたたかわしたりする。当然歩調を合わせねばならないものと思ひこんでいた私は、いつもその輪に加わっていたのだが、正直疲れていた。

あるときY Rが

「無理してつき合わなくて、いいんだよ。」と帰宅を促してくれた。Y Rは、実によく勉強する、人間味が言葉の表現に現れる、そしてその生い立ちとは別な悲哀を含んでいる人だということがわかってきた。

F 司教が線引きをされた三十歳の誕生日に三か月あまりを残して私は、大学に近い小さな教会でY Rとささやかな式をあげた。

私たちの結婚の証人として立ち会ってくださったのは、アメリカでお世話になったU 先生夫妻であった。手術のあとが癒えたばかりだった姉も式に参列して、

「〇は、修道院に入りたいと言っていたことを知っていますが、この日を迎えられて、母もほんとうに喜んでいます。」というあいさつをした。

その五年後に、姉は帰らぬ人となった。

引用文献

- 1 山田良一著 「青春の軌跡―自己確立への道」大日本図書
1981

キーワード

青年期的世界

依存と自立の葛藤

いかに生き、何をなすべき